天才とピアノ

ui

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天才とピアノ

【Ｎコード】
Ｎ５８５５Ｍ

【作者名】
ｕｉ

【あらすじ】
かつて透き通る歌声を持っていた少年。天才と持て囃された少年はいつしかその声を失ってしまい現実から逃げ出してしまうが――。

（前書き）

優しい感じのお話を目指してみました。

「その歌声が貴方の才能ね」
人々が口を揃えてそう讃えるのを、少年ははにかんだ笑みを浮かべて受け取っていた。誇らしげな父親、将来を指折り待ち侘びる母親。自分に関わるすべての人たち。
幼かった少年も思っていた。
自分の将来は、光で満ち溢れたものになるのだろう、と。

□　□　□

「あーったく、そんなんじゃダメだって！　やっぱりガキだった時がお前の最高潮だったってワケだよ」
嘆息混じりにヘッドホンを外した男から告げられた言葉。独特の雰囲気が漂うレコーディングスタジオの中、少年と男とを透明な壁が仕切り、向こう側の狭い空間で少年は今まで一心に歌い続けていたのだが――。

「もういいよ、ちょっと休め。しっかし、ガキの頃はあんなイイ声していたのが変声期でこんなに壊れるかねぇ。成長っつーのは時として残酷ってもんだよ」
「……ありがとうございました」
それ以上の言葉を聞き続けていたらどうにかなりそうで、片付けを手早く終わらせると少年は手近にあった己の肩下げバッグを持ち上げる。
「あっ、コラ！　まだ終わってねーぞ！」
怒声が後ろから追いかけてきても、少年はただ逃げ出すことしかできなかった。
逃げ出したまでは良かったが、あてもなく彷徨うことになってし

まった。夏の日差しが容赦なく照り付けてくる中、ほとんど毎日を歌の練習へと費やされてきた少年はこういう時どこへ行けばよいのかすら分からない。それでも休める場所、自分がいても良い場所を目指して少年はひたすら歩いた。

家に帰れれば良かったのかもしれない。

しかし、少年にとって家というところは居心地の良いものではなくなっていた。今の状況はとっくに家にいる母親の知るところとなっているだろう。少年の栄えある未来を盲目的に待ち望んでいる母親がそれを知れば、名女優並みに即座に浮かぶ涙を拭って見せながら「あなたはもっと頑張れるわ」と言うのだ。

少しずつ母親に反抗する心は削がれていき、疲れていた少年は母親と真っ向から対立することも諦め始めていた。

「……喉、渇いた」

この炎天下だ。目の端に映った自動販売機へと吸い寄せられるようにして少年はとある公園へと入る。子ども達が喜びそうなものといえばすべり台一つしかないような小さな公園だ。草木に手を入れている人がいるのか、木々は伸びすぎることなく枝を伸ばし、その合間合間に季節の花が誇らしげに咲いていた。

缶ジュースを買い求めてから座れる場所を探そうと視線を動かし、少年は目を見開いた。一目散に自動販売機へと駆け寄った彼は今まで気づけなかったのだが、この小さな公園には先客がいたのだ。

少女だった。少年と同じジュースを両手で抱え持ち、ぽんやりとした顔でこちらを見てくる。年の頃はといえば恐らく小学生の、それも中学年くらいなのだろうが、両端で結った髪が少女をより幼く見せた。

「……隣、いいかな」

「どーぞ」

他に座れそうな場所もない。思い切って少女に声をかけてみると、頷いてから心持ち体を右へと寄せ、少年のために場所を空けてくれ

た。少年は小さく礼を言って座ると、プルトップを開けて冷たいジュースを喉へと流し込む。こうして逃げ出した今はそれで喉の調子が悪くなっても構わないというやけくそに近い気持ちもあった。

「暑いですね」

「……え？　あー……うん、暑いですね」

冷たい液体が胃まで到達したような気になりながらようやく一息ついたところで話しかけられ、少年は隣に座る少女へと視線を向けた。俯いている横顔だけでは、彼女が今どんな表情をしているのかは読めない。

「走るとあっついです。でも、ここはすずしいです」

「……」

汗がダラダラと背を伝っている今の少年には同意できなかったが、まるで少女の代わりに答えるように彼らの間を風が通り抜けた。木陰になっているせいか、涼やかな風だ。

「……使いますか？」

小さな手がおもむろにスカートのポケットからハンカチを取り出す。その歳くらいの子ども達が好きなのだろう、クマのキャラクターが描かれたタオルハンカチに少年は苦笑しながら首を横に振った。ようやく少女の顔がはっきりと分かる。

泣きべそをかいていたのを、無理やり拭ってごまかしたような顔をしていた。先ほど遠目に少女と目を合わせた時には気づかなかった。

「自分に使いなよ」

もしかしたらこのハンカチで一生懸命涙を拭いていたのかもしれない。少年がそう返すと、少女は頷いて再びポケットの中へとしまいこむ。

「……僕も、走ってきたんだ。逃げようと思って……どこに逃げればいいのか、分からなかったけど」

「わたしもにげたです。ピアノなんか、きらいです」
少女もどうやら少年と似たような理由で逃亡していたらしい。しかし、少年は少女と違ってピアノが好きだったので思わず聞き返していた。
「ピアノ、嫌いなんだ？」
「そうです。ママもセンセもおこってばっかです。センセがカエルのオモチャでビックリしてた間ににげて来たです」
少し自慢げに少女が言ったのを見て、少年はつい小さく吹き出して笑ってしまった。
「僕もそれ、やってから逃げれば良かったな」
「きもちいーですよ？」
先ほどまでどこか悄然としていた少女も少年につられるように、先ほどのことでも思い出したのか楽しげに笑い出す。ひとしきり笑いあったところで、彼らは同時に息を吐き出した。

「おにーさんは何から？」
不意に問われて、少年は答えに詰まった。
何から逃げ出したかったのだろう？
歌うことは今だって好きだ。けれど、もうかつての声で歌えない自分。天才と呼ばれた歌声を失った己を責めるいくつもの視線、陰の声――それから、現実を見ようとしない母親の期待。
次第に少年の顔は俯いていった。少女のように決して涙を零したりなどはしなかったけれど、現実は一気に少年の心を蝕んでいこうとする。
と、その時。少し濡れた指先が、恐る恐るといったように少年の手に触れていた。
「わたし、歌うのはトクイです。歌います」
そう言うなり、少女は歌い始めた。澄み切った、透明な声で。少年が、今は失ってしまったもので。もしかしたら少年のものだった

声よりもずっと美しい声で。
歌っている間もずっと少女の指先は少年の手に触れていた。誰かが歌う声に恐怖心を抱くようになっていた少年にも、指を通じて少女の声が心に溶け込んでくるかのようだった。
やがて歌い終えた少女の手が離れていっても、少年は同じ感触を抱き続けていた。

「実は人前で歌ったの、おにーさんが初めてです。いっつもピアノやらされるから」
え、と再び少年は声を出していた。
「いつもピアノなんだ……。僕はピアノ好きだったのに一度もやらせてもらえなかったからなぁ。今の歌、とっても上手だったよ？……えーと」
「みずきです。青山みずき」
みずき、と少年は少女の名前を口の中で繰り返して覚える。よく見れば、少女が抱え持っているバッグには青山瑞樹、と彼女の親がサインペンで書いたらしい名前入りのキーホルダーがついていた。
「瑞樹の歌で元気になれたよ。……僕は、けいた。渋沢慶太」
けーた、と少女――瑞樹は声に出して繰り返し、覚えたと言って微笑むと、やがて名案とばかりに手を打った。
「わたしとけーたは取りかえっこすればいいです。わたしが歌うから、けーたがいっしょーけんめーピアノひけばいいです」
自信たっぷりに言い切った少女の顔はあどけないけれど、幼さ故の生命力で満ち満ちていた。瑞樹よりも年長である少年は、ここで彼女の考えを否定しなければならなかったのかもしれない。
けれど、少女の魅力的な提案に思わず慶太も頷いてしまっていた。
本当に彼女の提案に乗るとすればここからが問題だ。慶太の声を商売にしていた彼らは、慶太自身から切り出さなくてももうじき手を離してくれる。母親はどうだろうか。まず、子どもの考えなど一

蹴してしまうだろう。それから過去の栄光と呼べるかどうかも分からない軌跡を持ち出し、泣きながら頑張れとまた言ってくるかもしれない。
「うーむ、ママが強てきなのです。でも、負けないです。ママが相手でもカエルさんこーげきしてやります」
瑞樹はそう言って深く頷くと、一気にジュースを呷ってから元気良く立ち上がった。

「戦争です！　泣いちゃうけど、負けないです！」
立ち上がった瑞樹は慶太の正面へと立ち、思いっきり右手を空へと向かって伸ばした。それを眩しげに見ていた慶太も、少女の気迫に促されるように立ち上がり、缶をベンチの上へと置くと瑞樹と同様に思い切って右手を空に向かい伸ばしてみた。
こうして、空を見上げたのも久しぶりだったかもしれない。
遠く飛行機が見え、雲はすぐにかき消されて強烈な青だけが残る。

「僕も、戦う。逃げ出したり泣いたりするかもしれないけど、今度は……負けない」
こんなまっさらな空の下でなら、始められそうな気がした。『天才』だった自分を、かなぐり捨てて――いや、下敷きにすることが。

□□□
「……なに笑ってるの？」
「いや、ちょっと思い出し笑いを……ね」
ピアノの上で頬杖をついてこちらを見下ろしてくるその顔に、その表情にかつての少女の面影を見出して、音を奏でる指を止め、低い声で青年は堪え切れないように小さく笑った。
かつて『天才』と呼ばれた少年はもういなくなってしまったけれど――。

不満げに唇を尖らせる彼女をよそに青年がピアノで再び旋律を奏で始めると、少女は機嫌を直したのか笑顔を見せ、やがて歌い始めた。

彼らがここに至るまでに負った傷を、癒すように。

彼らが収めた勝利を、祝福するように。

少年と少女が誓った日からいくつもの季節を繰り返し、再び巡ってきた夏の空へと向かって、その旋律は高く高く響き渡ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5855m/

天才とピアノ

2010年10月8日14時14分発行